

3. 慶大産科における分娩例の先天奇形頻度

慶応大学医学部産婦人科学教室

飯塚 理八

昭和45年から50年9月までに慶応大学病院産科において分娩した6786例について先天奇形の頻度を調べ、それと黄体ホルモン剤使用との関連性を追究した。

6786例中先天奇形児は191例(2.8%)で、その中重症、すなわち致命的或は不治、或は大手術を要する奇形が34例(0.5%)で、軽症が135例(1.99%)であった。

また心雑音、チアノーゼ、不整脈等の症状のあったものを追跡して心奇形を認めたものが22例(0.32%)あり、これと前述の重症の先天奇形児

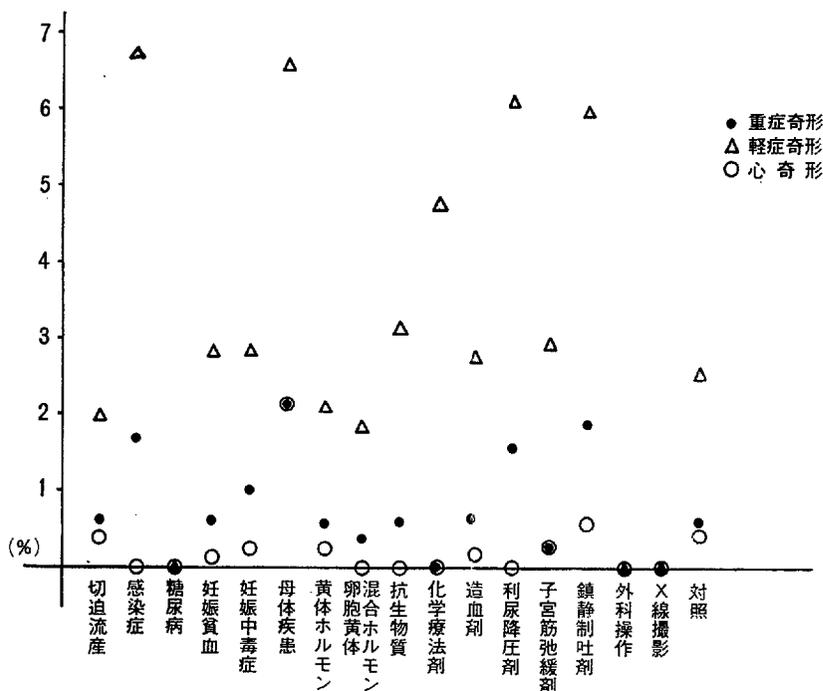
とを加えると56例(0.82%)になる。

妊娠中の母体疾患あるいは治療とこれら奇形児出現頻度との関係は図1に示すように、妊娠中黄体ホルモン或は卵胞黄体混合ホルモンを使用した群で特に奇形児の出現頻度は高くない。

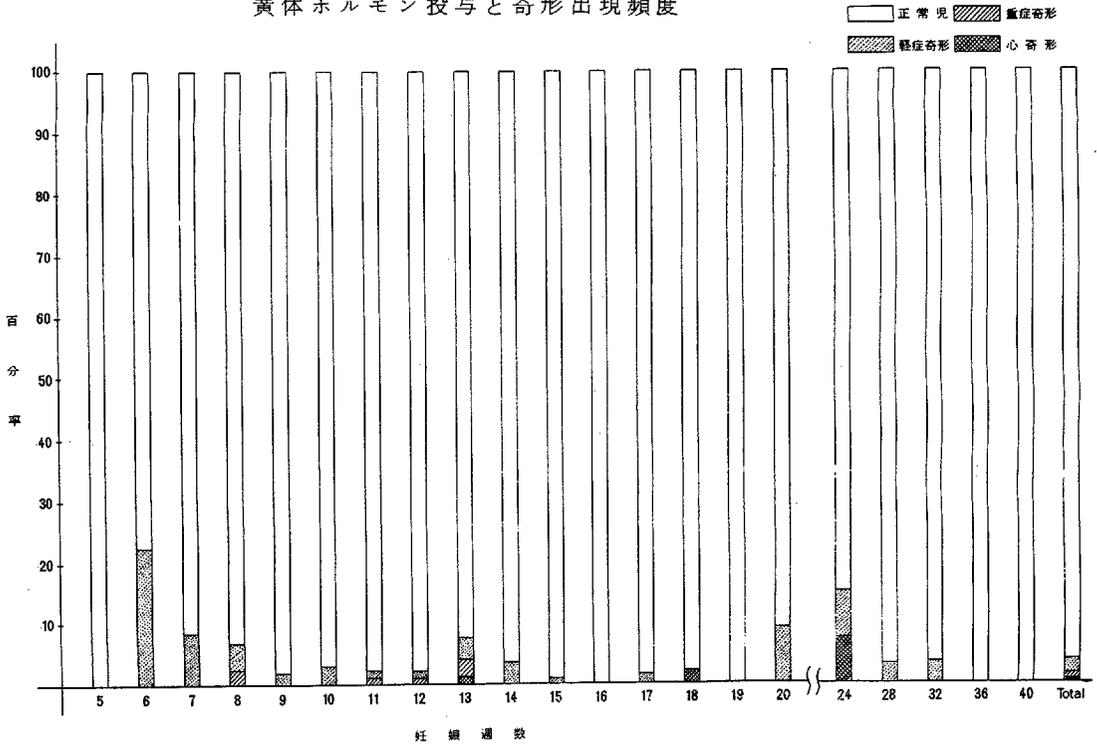
また図2、図3には黄体ホルモン、及び卵胞黄体ホルモン投与と奇形児出現頻度との関係を、これらホルモンを投与した妊娠週数別に示したが、特に心奇形や重症奇形の出現が多い時期はない。

以上から先天性心奇形児が黄体ホルモン剤を使用して特に増加するとは言えないように思われる。

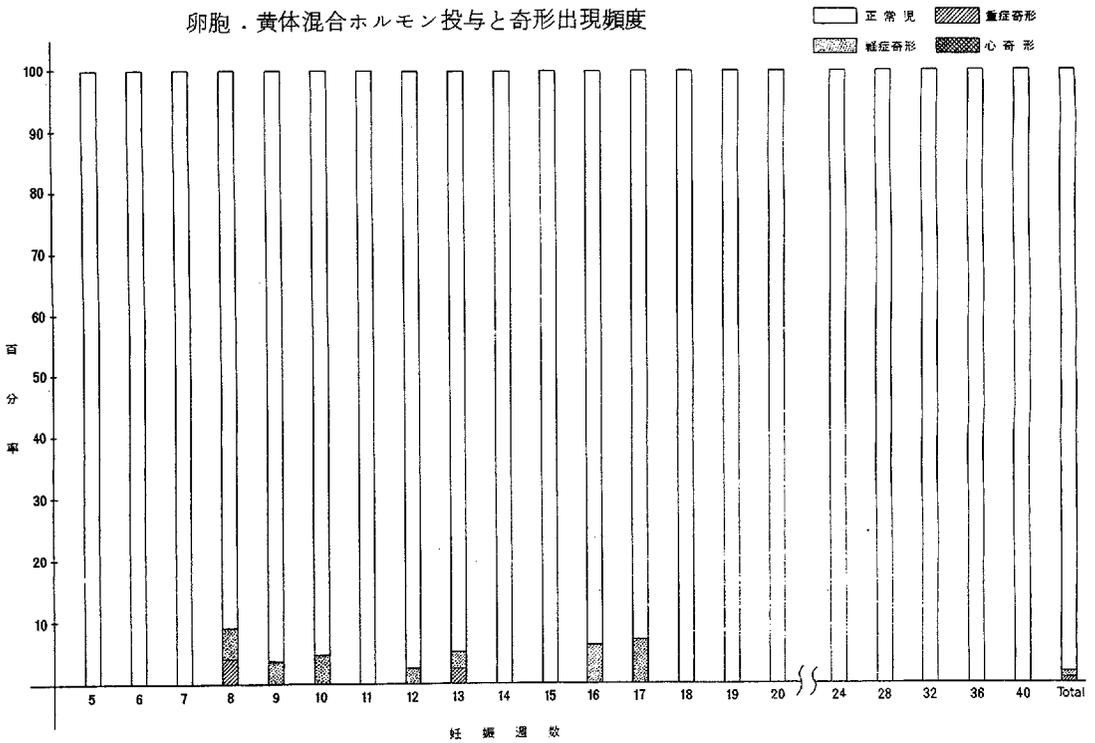
妊婦疾患および治療と奇形児出現頻度

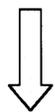


黄体ホルモン投与と奇形出現頻度



卵巣・黄体混合ホルモン投与と奇形出現頻度





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 45 年から 50 年 9 月までに慶応大学病院産科において分娩した 6786 例について先天奇形の頻度を調べ、それと黄体ホルモン剤使用との関連性を追究した。

6786 例中先天奇形児は 191 例(2.8%)で、その中重症、すなわち致命的或は不治、或は大手術を要する奇形が 34 例(0.5%)で、軽症が 135 例(1.99%)であった。